

七夕に何を願う？  
なぜ願う？

豊島区立池袋第一小学校

6年 久郷 咲友



# はじめに



5年生の学芸会で、「銀河鉄道の夜」という劇をしました。宮沢賢治原作のこの作品は、主人公のジョバンニが親友のカムパネルラと一緒に「銀河鉄道」に乗って、銀河をめぐる旅をする話です。二人が乗る「銀河鉄道」は「天の川」に沿って走り、鉄道に乗りながら様々な星を訪れます。天の川は、夏の夜空を見上げると雲の光の帯のように見える様子を表しますが、雲ではなく、望遠鏡や双眼鏡などで眺めると無数の星の集まりだそうです。

「銀河ステーション、銀河ステーション」

と学芸会のワンシーンがよみがえってきます。

「天の川」といえば、7月7日の「七夕」です。七夕では、短冊に願い事を書いて、笹竹に結びつけます。私は、以前から七夕の行事になぜ願い事をするのか気になっていました。天の川に願いをかけているのでしょうか。それとも何か他のものに願いをかけているのでしょうか。そして、みんなは、どんなことを願っているのでしょうか。この行事はいつから日本にあり、現在まで受け継がれてきたのかということも大変気になります。

「銀河鉄道の夜」の劇をきっかけに、私は、七夕について知りたいという思いが強くなりました。銀河鉄道の旅の続きをしようと思います。

七夕に何を願う？なぜ願う？



# 目次



はじめに	1
1、七夕行事のふりかえり	3
2、七夕行事のはじまり	8
3、なぜ笹竹？なぜ短冊？飾りの意味はどんな意味？	14
4、みんなの願いはどんなこと？	19
5、七夕に何を食べる？	22
6、郷土資料館と七夕	29
7、日本各地の七夕行事	36
8、東京タワーの天の川イルミネーション	45
終わりに	46
参考にした本	48
訪れた施設	50
利用した図書館	50

# 1.七夕行事のふりかえり



私は、小学校6年生までどのように七夕を過ごしてきたのでしょうか。振り返ることで七夕の行事のことが少し分かってくるような気がします。

幼稚園の頃は、7月7日の七夕が近付くと、園庭に大きな笹竹が置かれました。その笹竹に、色とりどりの短冊や自分で作った七夕飾りを結び付けました。そして、その笹竹の周りで「たなばた」の歌をみんなで歌いました。また、先生から「たなばた」の絵本を読んでもらいました。私が覚えている絵本の内容は、次の通りです。

むかし、天上に織姫と彦星がいました。織姫の仕事は、機を織ることで、彦星の仕事は、牛飼いです。その二人は、仕事熱心でした。二人は結婚しますが、結婚をきっかけに仕事をなまけるようになってしまいました。その様子を見た天帝は怒ります。そして、二人を天の川を隔てて別れさせてしまいます。悲しんでいる二人を見て、天帝は、毎日しっかり働くことを条件に年に一度、七夕の日に天の川を渡って、二人を会わせることにしました。天の川の橋の役目をしたのがかささぎという鳥です。

私の記憶の中にある七夕の物語は以上になります。たなばたの歌は、「歌はともだち」という学校で使う歌集(※1)にのっていたものを参考に書き出します。



○歌「たなばたさま」



権藤はなよ 作詞

林柳波 補作

下総 皖一 作曲

- 1 ささのは さらさら のきばにゆれる おほしさま きらきら  
きんぎん すなご
- 2 ごしきのたんざく わたしが かいた おほしさま きらきら  
そらから みる

改めて、歌ってみると、意味の分からない言葉がいくつかあることに気が付きました。歌集にも解説がそえられてありました。歌集の解説で分からなかった言葉は、国語辞典(※2)で調べました。

☆のきば(軒端)・・・のきのはし。また、のきに近いところ。

☆のき(軒)・・・やねのはしの、建物より外につきだしたところ。

☆すなご(砂子)・・・金や銀の粉 ※1より

☆ごしき(五色)・・・①五つの色。ふつう、青・黄・黒・赤・白をさす。

②いろいろな色。

「のきば」「のき」「ごしき」は※2より

なつかしいメロディとともに楽しかった幼稚園生活が思い出されます。

小学校に入学してからは、学校で短冊が配られ、それに願い事を書くこともありました。また、毎年、7月7日やその前後の給食には七夕にちなんだ行事食がでます。今年の七夕の献立は、枝豆とわかめのごはん、七夕汁、鱈の照り焼き、梅ドレッシングサラダ、天の川ゼリー、牛乳でした。七夕汁の中に、そうめんが入っていて、天の川をイメージしているのかなと思いました。天の川ゼリーは、青色のゼリーの中に、星形のナタデココがはいっていました。とてもおいしかったです。



給食の写真は、豊島区立池袋第一小学校のホームページ(令和5年7月7日のページ)の写真を使用しました。(※18)



このように小学校生活においても七夕の行事に親しんでいることが分かります。今年の7月7日は習い事だったため出かけられなかったのですが、去年の7月7日には、近くにある熊野神社(☆1)という神社へお参りに行きました。境内は、七夕飾りでいっぱい、その飾りが風に吹かれるとキラキラして、風に揺れて聞こえる音がまるで水が流れる音のようでした。お参りが済んだ後、自宅に戻り、簡単に七夕制作をして、和菓子を添えて星空にお供えをしたことを思い出します。次の写真は、去年の七夕の様子です。写真の出典は、令和4年7月7日、母と私が撮影しました。七夕飾りの織姫と彦星は、私が作りました。



以上、七夕の行事を振り返ってみると、幼稚園の頃から今にいたるまで、親しんできた行事だということが分かります。歌があり、飾りがあり、そして行事にちなんだ食事やお菓子があつることゝ改めて気づきます。私の生活の中において、とても身近にある行事ですが、よく考えてみると、疑問に思ふことがいくつかあります。なぜ七夕の日に願ひをするのでしょうか。織姫と彦星のお話の中には、笹竹は出てきませんが、どうして笹竹に飾りをつけ、短冊に願ひ事を書くのでしょうか。それから七夕の行事食にこめられた意味はあるのでしょうか。今まで、何となく過ごしてきてしまつた七夕になぞが秘められています。七夕のなぞを1つ1つ解決していきたいと思ひます。分からない部分がある七夕行事のあれこれを調べて、七夕行事を毎年、楽しみたいという思ひでいっぱいです。

まず、私は、七夕行事の始まりについて、本を使って調べようと思ひ、図書館へ行きました。自宅の近くの図書館だけでなく、少し離れたところにある図書館にいき、「行事」のことを中心に書かれた本を借りて来ることにしました。



左の写真は令和5年9月8日父撮影。こんなにたくさんさんの本を使ったね!



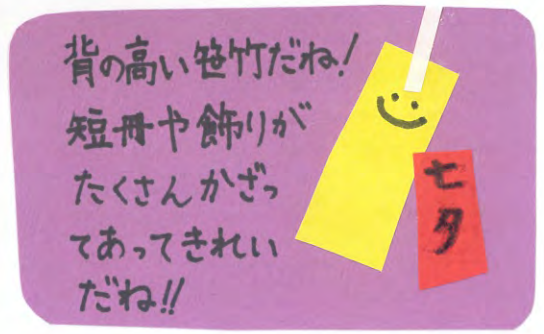
## 2.七夕行事のはじまり



七夕の行事をふりかえり、私が幼稚園に通っているときから、とても身近な行事として親しんできたことがわかりました。七夕行事は、私が小さな頃からある行事ですが、その始まりはいつだったのでしょうか。本で調べる前に、七夕行事がいつ頃からあるのか予想を立てました。

○七夕行事の始まりは？私の予想

七夕行事は、いったいいつから日本にあるのでしょうか。4年生の調べる学習で、年越しそばについて調べたときに、「深川江戸資料館」☆2に出かけました。江戸の庶民の暮らし、長屋などの暮らしの様子が分かるように、この資料館は、ほぼ実物大のレプリカが再現されていました。その中に、七夕飾りがあったことを覚えています。だから、江戸時代には、七夕の行事はあったということになります。また、6年生になり、社会では歴史の授業が始まりました。平安時代は、仮名文字が発達して、日本独自の国風文化が花ひらき、いろいろな年中行事が始まるようになったことを学習しました。よって、七夕の行事は、平安時代に始まり、江戸時代においては、笹竹に短冊をつける行事として庶民の生活に親しまれていたと私は、予想します。次の写真の出典は、令和3年7月11日、父と母、撮影になります。江戸の庶民の暮らしの中の七夕飾りの様子が分かります。



○本で調べて分かった七夕行事の始まり

七夕という行事がいつから始まったのか本を使って、調べていきたいと思えます。何冊かの本を読んでいると、七夕行事は、日本にもともとあった風習と中国から伝わってきた「乞巧奠(きっこうでん)」という風習が合わさって生まれた行事であることが分かりました。七夕伝説が中国から伝わったことは、知っていましたが、日本にあった風習と合わさったことを初めて知り、驚きました。

○日本にもともとあった風習とは？

はじめに、日本にもともとあった風習について何冊かの本を読んで分かったことをまとめます。日本では、7月7日頃の夜に祖先の霊が戻ってくると言われる、今でいうお盆のような行事があったそうです。祖先が帰ってきそうな湖や川



のそばに、小屋を作って、「棚機つ女(たなはたつめ)」と呼ばれた村で選ばれた少女が祖先に着てもらう衣を織機で織り、小屋の棚にお供えしたとありました。織機で機を織るときに、病気や悪いことが起こらないようお願いするといった風習もあったようです。

「神様をむかえ祀るため、棚機つ女という機織りの乙女が水辺の機屋にこもって機を織るというもの」※3より

「祖先が帰ってきそうな川や湖の水べに、はりだした小屋をつくった。村で選ばれた少女が、その小屋で、祖先に着てもらう衣を織機で織り、小屋のたなにおいた。その選ばれた少女を『棚機つ女』といったんだ。」※4より

「むかし、7月7日はみずのかみさまをむかえるぎょうじをおこなうひでした。『たなばたつめ』とよばれるおんなのひとがよどおしはたをおり、おりあがったぬのをかみさまにそなえ、びょうきやわるいことがおこらないようにおねがいましたのです。」※5より

本を読み、日本にあった「たなはたつめ」の風習は、水辺で祖先を迎えるという習わしで、お盆のような行事だったことが分かりました。また、「たなはたつめ」が祖先のために機を織るという役割と七夕伝説の織姫の仕事が同じことに気が付きました。この「たなはたつめ」という風習がもともとあったということもあり、中国の乞巧奠を受け入れることにつながったのではないかと私は考え

ました。さらに、「七夕」と書いて「たなばた」と読むことが「たなはたつめ」の風習からきていることも学ぶことができました。次の「たなはたつめ」のイラストは※3の本を複写したものです。

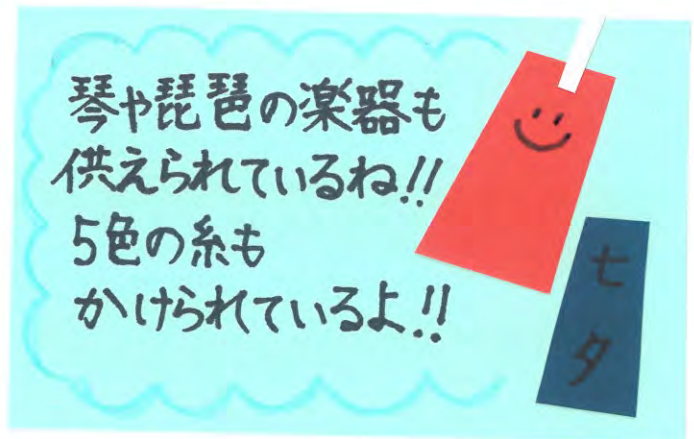


次に中国の乞巧奠について、本から調べて分かったことをまとめます。

○乞巧奠とは??

中国では、7月7日の夜、天の川の兩岸にいる星が年に1度だけ会うといった話があり、「星まつり」が行われていたそうです。その日は、女の人が星にウリや花などをお供えして、竿の先に5色の糸をかけて、裁縫の上達を願ったり、文字や琴の上達も願ったりしたそうです。私が使う社会の教科書に乞巧奠が伝わってきたときの七夕の様子を再現した写真がのっていました。竿の先に5色の糸をかけている様子がよく分かります。





★上の写真は、私が学校で使う教科書、「小学社会6年」日本文教出版 令和5年2月3日 発行 91ページより複写しました。

この星に願う行事が「星まつり」、つまり、「乞巧奠(きっこうでん)」の内容だということが分かりました。それが日本に伝わり、日本の「たなはたつめ」という風習と合わさって、「たなばた」が生まれたのは、前に述べた通りです。やはり、日本に受け入れるだけの風習があったから2つは、合わさることができたと私は考えます。

最後に、七夕の行事がいつ頃始まったのかについて調べました。※3の本には、平安時代に中国から乞巧奠が伝わり、宮中行事となって様々なものをお供えして詩歌を詠むという行事が始まったことが記されていました。※6の本にも平安時代の貴族の間で、詩や音楽の上達を祈る行事として七夕があったということが書かれていました。よって、「乞巧奠」と「たなはたつめ」が合わさった七

七夕の行事は平安時代に始まったということになります。はじめは、貴族の間で広まった行事で、それが庶民に伝わって、七夕行事が盛んになったのは、江戸時代に入ってからようです。※3の本に、「江戸時代になり、七夕が五節句のひとつに定められると、七夕の行事や風習が庶民にも広まりました。」とありました。そして、この本には、笹竹にお飾りや願い事を書いた短冊をつるす「七夕飾り」も江戸時代に広まった風習と書かれていました。つまり、平安時代の前には日本の「たなはたつめ」という風習があり、その風習に中国の乞巧奠という行事が合わさり、現在の七夕行事のような形ではじまったのが平安時代。平安時代に貴族の間で親しまれ、平安時代から江戸時代にかけて少しずつ変化しながら多くの人々の間に広がっていった行事、それが七夕行事だとまとめます。

#### 調べた結果

日本には、もともと水辺で祖先のために機を織る少女、「たなはたつめ」の風習があった。そこに中国から七夕伝説や乞巧奠といった裁縫や文字の上達を星に願う行事が伝わった。「たなはたつめ」の受け皿があってそこに中国の乞巧奠が合わさり、貴族の間で七夕行事が始まったのが平安時代。江戸時代には庶民の間にも広まっていった。





### 3. なぜ笹竹?なぜ短冊? 飾りの意味はどんな意味?

笹竹に短冊や飾りをつけることは、江戸時代からはじまったと分かりましたが、なぜ笹竹を使うのでしょうか。また、笹竹に短冊や飾りを結び付けるのはどうしてでしょうか。その理由については、まだはっきりしていません。笹竹を使う理由を調べる前に、笹竹とはどのような植物なのか、植物図鑑※7をひらくことにしました。

植物図鑑には、「笹竹」という項目ではのっていませんでした。国語辞典※2で「ささたけ」をひくと、「小形の竹のこと」と説明があり、もう一度、植物図鑑の「タケとササ」について書かれてあるページをじっくりながめることにしました。タケとササは、茎や葉がにている植物です。どのように区別されているかというと、皮がすぐに落ちる(タケの仲間)か、いつまでもついている(ササの仲間)か、節から出る枝は何本かということで区別されているようです。また、いっばんには、背の高さのちがいで呼び分けられていることも分かりました。竹は背が高いものが多く、笹は背が低いものが多いということです。また、竹は茎が太く笹は茎が竹と比べて細いということも分かりました。七夕に笹竹を使う理由について、※5の本には、2つのことが記されていました。1つ目は、竹は1日に1メートル以上も伸びるので、そのような竹に願いをたくすことで、天に願いが届くという意味があるということです。2つ目は、竹にある節目が七夕の時

期である季節の節目(夏と秋)とそろっているということです。また、※8の本では、「まっすぐにのび、しなやかで強い竹。その姿に、むかしの日本人は、神聖さと生命力を感じていたようです」とありました。2冊の本から分かるように、七夕の行事で、笹竹が利用される理由には、笹竹の成長の様子に生命力を感じて、願いをたくすのにぴったりな植物だからということになります。

私は、竹に願い事を結びつけることについて、竹は結びつけるのにふさわしい植物だと思いました。天に向かって、真っすぐのびるところ、そして、成長が早いので、天の星に願いが届きそうだとということ、それから、日本になじみのある植物に結びつけることによって日本の行事らしさが出るような気がするからです。「竹取物語」といった昔話の中にも竹は登場しています。夏休み中に、東板橋公園☆3の中にある竹林を見に行きました。まっすぐ空に向かって、生えている竹を思わず見上げてしまいました。確かに空(天)に届きそうでした。次の写真は、令和5年8月18日に、母と私で撮影したものです。



次に願い事を書き記す短冊について調べました。短冊を飾る習慣は江戸時代から始まったそうです。※6には、「竹に短冊を飾る習慣は江戸時代から。字が上手になるように願い、歌などを書いたのに始まります。」と書いてあります。このことから、字の上達を願うことが短冊を書くことの始まりだったと知ることができました。また、※8～※10の本を読み、短冊の色について分かったことがあります。短冊には、古くは青・赤・黄・白・黒の5つの色が使われたそうで、魔除けの意味があるようです。昔は、短冊のかわりに、クワ科の植物の葉が使われていたことも分かりました。

それから、笹竹を彩るいろいろな飾りにこめられた意味についても調べました。笹竹を彩る七夕飾りの折り方や意味については、※3、※9、※11の本を参考にまとめました。

① ちょうちん

願い事をかいた短冊を明るく照らすという意味

② あみかざり

漁師が魚をとる際につかう「投網(とあみ)」からきていて大漁を願う意味。

また、作物がよく実るようにと願いをこめる飾り。いろいろなあみ飾りがある。



③ ふきながし

織姫が機をおる糸に見立てている。機織りや裁縫の上達を願う。魔除けの意味もある。

④ 折り鶴

長寿の縁起物である折り鶴。長生きの願いをこめて飾る。

⑤ くす玉

くす玉は、魔除けとして室内に吊り下げられていたのが始まりで、それをかたどって飾る。

⑥ お財布

お金に困りませんように、という願いを込めて飾る。

⑦ 紙衣(かみごろも)

裁縫や機織りが上達するようにねがいをこめた神の着物のかざり。

⑧ 五色の短冊

災難、厄除け、魔除けの意味がある。

私は、夏休み中、祖母と母と叔母と一緒に七夕飾りを作りました。七夕飾りには、それぞれの飾り一つ一つに意味があり、「きれいだから」という理由だけで飾っているわけではないと分かりました。例えば、網飾りは漁師の網に見立て

ていて、大漁を意味し、それが農作物の豊作も祈願すること。提灯は短冊を明るく照らすためにあるということです。私は、今まで七夕飾りを作るときに意味を考えないで何となく「きれいだなあ」と思いながら作っていたり、「何かこういうものを作ったらかわいいかな」と思って、勝手なものを作ったり折ったりしていたので、これからは意味も考えながら作り、そして飾りたいと思いました。

下の写真は、手伝ってもらいながら作った七夕飾りの写真です。

令和5年8月20日父と母撮影



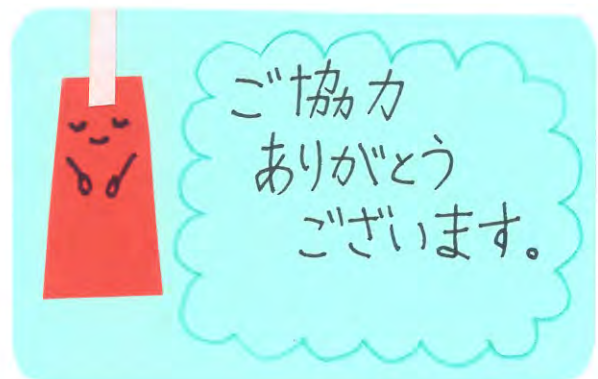


## 4. みんなの願いはどんなこと?

七夕は、短冊に願いを書いて、その短冊を笹に結びつけます。本を読むと、願い事を書いてそれを笹竹に結びつけることは、江戸時代に始まり、今に伝わっていることが分かりました。私は、今までに、健康のことや学習のこと、将来の夢のことを願って短冊に願い事を書いていました。みんなは、どのようなことを短冊に記すのでしょうか。周りの人に聞いてみました。

調査にご協力してくださった方は、30名です。年齢別に4つのグループに分けます。

- ① 幼稚園～小学生(1～3年生)
- ② 小学生(4～6年生)
- ③ 中高大生
- ④ 社会人



願い事の調査をして、気が付いたことをまとめます。

グループ①幼稚園～小学生(1～3年生)は、「～になりたい」「将来〇〇になれますように」というように、将来なりたい職業のこと、そしてなりたいキャラクターで答えることが多いことに気が付きました。具体的には、「仮面ライダーになれますように」とアニメのキャラクターの主人公になりたいと答えた男の子がいたり、「はやぶさの運転手になれますように」と将来なりたい職業のことを

願い事にした男の子がいたりしました。グループ②になると、現実的な願い事が多かったです。「健康」や「学業」に関わること、「塾で成績やクラスが落ちないように」と願い、現実的に困っていること悩んでいることが解決するように願っている人が多くいました。1名ずつでしたが、「ピアノの上達」と「書道の上達」を願う人もいて、芸術面の上達を願う内容もあることに気が付きました。グループ③の願い事は、「学業」に関する内容と「レジャー」に関する内容に大きく分けられました。グループ④の社会人は、「健康」「長生き」を願う人が多かったです。それから、「世の中の平和」や「温暖化防止」「子どもや孫の成長」「親の健康や旅先の幸せ」を願う、願い事もありました。自分自身の願いというよりは、家族、周りの人、そして環境のことを考えていることがわかります。年齢を重ねると周りの人や物にも目を向けた願い事になっていくのかなと思いました。

では、本来の七夕の行事では、どのようなことを何に願うのでしょうか。

※6の本には、「平安時代の貴族は詩や音楽、江戸時代の寺子屋では習字や読み書きの上達をいのりました。」とありました。※12の本をよむと、乞巧奠では、裁縫や手芸が上手になるようにと願いをこめて5色の糸の束を織姫星がよく見える窓辺の机に飾ったということが分かり、また、※13の本には、乞巧奠において何を願ったかくわしく書かれていました。「乞巧は上達を願うこと。奠は『まつる』という意味。五色の糸や布、金銀の針などを飾り、後に琴や琵琶な

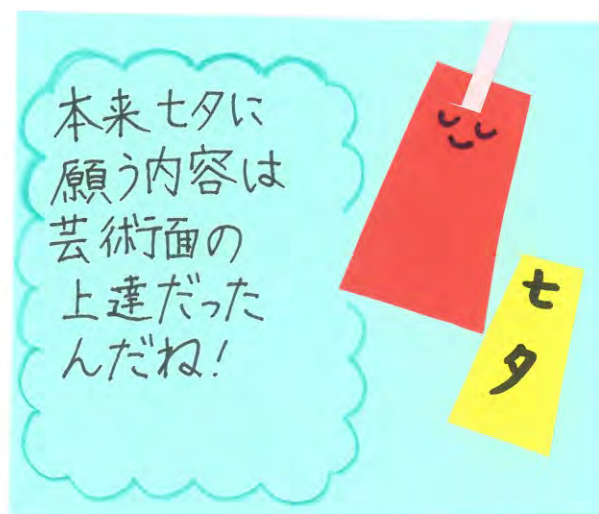


どの楽器、筆や硯なども供え、芸事や書の上達なども願いました。」とあります。

このことから芸術面の上達を願っていたことがわかります。また七夕の行事のもともとは、「たなはたつめ」の習わしです。「たははたつめ」も機織りをしていました。やがて乞巧奠が伝わり、両者が結びついたものが現在の七夕の行事です。

乞巧奠は、織姫の仕事から裁縫の上達を願い、そこから芸術などの上達といった願いに広がっていったことが分かります。つまり、七夕の行事で、本来、願う内容は芸術面の上達だということが言えそうです。願う内容は、時代を経て、少しずつ変化、広がっていったのかなと感じました。また、願い事をする人(特に年齢)によって願い事の内容に違いが見られることも調査によって分かりました。

乞巧奠で考えると、願う対象は、天の川の星、織姫星(織女星)だということも分かりました。



## 5.七夕に何を食べる？



池袋第一小学校では、毎年7月7日前後の給食に、七夕の行事にちなんだ行事食がでます。見た目も味もとても素敵で楽しみにしています。

七夕にちなんだ行事食といえば、定番のそうめんです。そして、星の形をしたゼリーもよく登場します。七夕の行事食は、本当に「そうめん」なのでしょうか。そうめんだとしたら、そこにどのような意味をこめているのか知りたいです。私は、七夕の行事食について本で調べることにしました。

### ○七夕の行事食、私の予想

やはり給食にも登場することが多い「そうめん」だと思います。白い糸に見えるのもそうですが、天の川の流れのようにみえるからです。

### ○七夕の行事食は、これだ！

本を使って、七夕の行事食について調べていると、やはり、「そうめん」と書かれていることが多いことに気が付きます。

例えば、※8の本には、「平安時代から、七夕にはめん(そうめん)を食べると病気をしないとされていました。また、細長いめんが糸に見えることから、七夕にそうめんを食べると、さいほうが上達するといわれています。」とあります。



また※14には、「平安時代には宮中で七夕にそうめんが食べられていて、その日にそうめんをたべると病気にならないと考えられていました。江戸時代には、人々は七夕にそうめんを食べていました。」とあります。七夕のそうめんは、平安時代には、宮中の方々に食べられ、江戸時代になって庶民にも食べられるようになったことが分かります。また、そうめんを食べると病気をしないとされていたことも分かります。

さらに、※15の本には、「七夕に食べる物には、そうめんがあります。そうめんの歴史は古く、平安時代の宮中で七夕を祝う儀式に『索餅(さくべい)』と呼ばれる菓子を供えた記録があります。これが小麦粉や米粉に塩を加え、縄のように細く練ったものであることから、そうめんの原型といわれています。『索餅』は、やがて舌ざわりのよい、なめらかなそうめんになっていきました。」とありました。そうめんの原型である「索餅」の存在が気になります。すると、※3の本に「索餅」を再現した写真が掲載されていました。複写してのせます。※3には、「古代中国では『七夕の節句』に食べられていたとされる、小麦粉などをねり、縄のようによりあわせて調理した食べ物です。どのような食べ物だったのか正確にはわかりませんが、現在も残る、写真のような中国のお菓子だったと考えられています。」とあります。

私は、そうめんの原型「索餅」の写真を見て、今のそうめんとは、全然違うと

思いました。例えば、色や形です。「索餅」の色は茶色で、そうめんの色は白です。形ですが、「索餅」はねじってあり、そうめんと比べてだいぶ太い感じがします。「索餅」は、乞巧奠の際にお供えする束ねた糸の形に似ていると思いました。乞巧奠は、裁縫の上達を願う行事なので、糸を表した食べ物だったのではないかと予想しました。「索餅」を実際に食べたことはありませんが、食感にも違いがありそうです。そうめんは、柔らかくつるっとした食べ物ですが、「索餅」は、少し固めで、おせんべいのような感じなのかなと思います。次の写真は、※3の96ページにのっていた「索餅」を複写したものです。



本で読んで分かったことは、七夕には昔からそうめんが食べられていることです。そうめんは、七夕の行事食といえそうです！！

そうめんが七夕の行事食と分かり、納得がいきました。そうめんは、見た感じが糸や天の川に似ているからです。また、つるっと食べられて、夏の暑い時でも食欲のないときでも食べられます。七夕の時期にぴったりの食べ物だなと感じます。

私は、夏休みを利用して、母に手伝ってもらいながら七夕の行事食を作ることに挑戦することにしました。題して、「天の川を見上げて」です。塾の夏期講習のお弁当用と家族が食べる用で作りました。

材料4人分：そうめん(4～5わ)、めんつゆ(適量)、小ねぎ(飾り用)、卵(2個)、  
ハム(薄切り4枚)、オクラ(3本)、カニカマ(適量)、サラダ油、塩  
(少々)

調理用具：鍋、包丁、まな板、フライパン、ボウル、茶こし、星型の型抜き

調理に取り組んだ日：令和5年8月19日(土)

まず、沸騰した鍋で飾り用のオクラをゆでました。オクラは、ゆであがったら、包丁で8ミリメートルくらいの幅で切ります。オクラは、自然の星形です！次に、ボウルに卵を溶いて、塩を少々入れ、よくかき混ぜます。茶こしで一度、卵をこすと白身と黄身がよく混ざります。フライパンにサラダ油をひいて、薄焼き卵を作ります。薄焼き卵は、焼けたら、冷ましておきます。冷めた薄焼き卵とハムは、クッキーの型を使って、星形にぬきとっておきます。飾り用のカニカマは、小さく写真の通りの大きさに、切っておきます。小葱も輪切りに切っておきます。

次に、大鍋にたっぷりのお湯を沸かして、そうめんをゆでます。ゆであがった

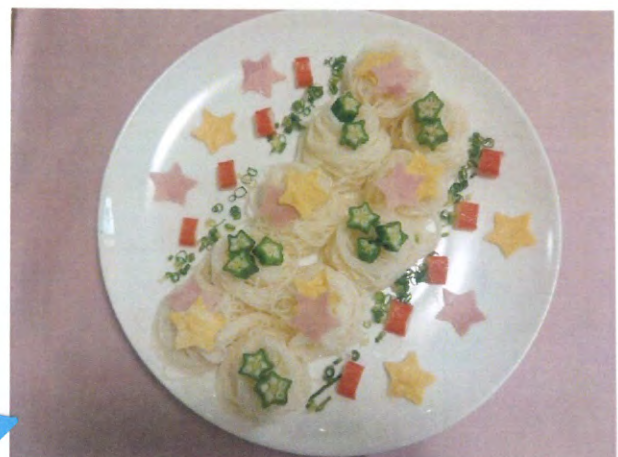


ら、すばやく冷水でよくぬめりをとります。

最後に盛り付けです。そうめんは、フォークとスプーンを使って、くるくると一口で食べられるように巻き取って盛り付けます。お弁当箱には、6つの渦巻きとして詰めました。大きいお皿の方には、天の川のように見えるように渦巻きを並べました。トッピングで用意した星形の卵、ハム、オクラ、それから小葱とカニカマを好きなようにデコレーションしておしまいです。

七夕弁当と「天の川を見上げて」の七夕の行事食ができました！！

下の写真は、令和5年8月19日母撮影



### 【食べた感想】

父：見た目がキレイで、暑い日でも食欲がわいてきました。1つ1つそうめんが  
まとまっていたので、食べやすかったです。

母：みんなが喜んでくれたのでよかったです。オクラのゆで加減がきれいな星形  
をつくるポイントになります！！

兄：そうめんを食べやすいように、巻いてお皿に盛り付けていることに驚きまし  
た。卵焼きやハムをくり抜いて星形にするだけではなく、自然な断面の形を  
星として利用するオクラの使い方がよかったですし、美しかったです。

そうめんとともに食べる具材を普段は、細かく切っているだけでしたが、星形  
にくり抜いたことで、「七夕」という感じが出てよかったです。簡単そうに思え  
る型抜きですが、意外と難しく、薄い卵やハムはすぐに破れてしまいました。そ  
こで、ハムは何枚か重ねた状態で型抜きをすると破れにくくなることを体験し  
て分かりました。最後に、私が持っていくお弁当箱に詰めるときですが、ハムと  
卵のバランスを考えてそれらを置くことでよりきれいに見えました。父も兄も  
言っていましたが、そうめんを少しずつ分けて巻くことで食べやすくなりました  
。また、巻いてあることで、織姫の糸により似ている感じがしてよかったですと思  
いました。



※17の本には、そうめんだけでなく、七夕に食べられる物について書かれていました。例えば、長野県の松本地方の一部では、七夕の時期に「七夕ほうとう」を食べるそうです。あんこをからめて少し冷やしてから食べるそうです。写真は、※17の51ページを複写させていただきました。また、福岡県の一部の地域では、ツルがついたスイカを七夕にそなえるそうです。ツルのようにのびのび育つように、成長を願うそうです。同じく、スイカの写真も※17の51ページを複写しました。写真のスイカは、15～20キロくらいもあるそうです。

スイカを七夕にそなえる地域もあると知り、スイカは夏が旬の食べ物なので、七夕と時期とも合うなと思いました。また、ツルの成長と子どもの成長を重ね合わせていることがそなえる理由だと理解することができました。

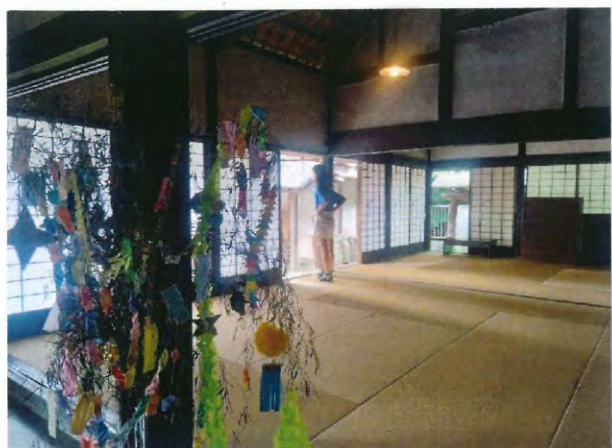




## 6. 郷土資料館と七夕



令和5年7月9日、私は、板橋区赤塚にある郷土資料館を訪ねました。古民家があり、その古民家の前に七夕飾りがあると知り、少し前の暮らしやその暮らしとともにあった七夕の様子分かるのではないかと思い、訪ねてみることにしました。その時の様子は、次の写真の通りです。令和5年7月9日、父と母撮影。



現在の七夕飾りと異なり、笹竹が1対あり、笹竹の間に藁で編まれた馬が2頭飾られていました。本当は、馬と笹竹の前にお供え物を置く台があり、その上に野菜や果物が供えられるそうです。私が伺ったときは、雨の影響で、供え台は古民家の中にありました。

郷土資料館の齋藤裕子館長さんがいろいろと教えてくださいました。

私：これ(動物の形の人形を指して)は、何ですか？

館長：これは、藁で編んだ七夕馬です。首がたっているのが、オスの馬で、首が下がっているのがメスの馬です。

私：なぜこのような形で飾ってあるのですか。

館長：昔は、1対の笹竹の間に七夕馬を飾って、七夕馬の前にお供え物をするのが一般的な七夕飾りだったようです。ですが、今日は、雨が降っていたので、お供え台は古民家の中にあります。よかったら、古民家の中もみてみてくださいね。

古民家の中に入ると、お供え物の台があり、たくさんの季節の野菜や果物が供えられていました。きゅうり、ナス、トマト、じゃがいも、とうもろこし、枝豆、すいかななどの夏野菜や桃、ぶどう、さくらんぼなどの果物がありました。私が気になったのは、おまんじゅうです。館長さんに伺ったところ、この郷土



資料館に勤めている職員の方が作ったおまんじゅうでお供えする物の一般的なものの1つだそうです。郷土資料館の七夕の様子で学んだことや気が付いたことがいくつもあったので箇条書きで記します。

- ① 昔は、藁(わら)で馬を編み、笹竹の間に飾っていたこと。その馬のことを七夕馬といい、七夕行事に用いる真菰(まこも)や茅(ちがや)で等で作ったこと。七夕馬は、家や地域によって藁で作るところもあるということ。
- ② 七夕飾りの前には、供え台があり、野菜や果物だけでなく、うどんやおまんじゅうもお供えするということ。
- ③ 古民家の外にも内にも笹竹が飾ってあったこと。笹竹には、短冊はもちろん、折り紙で作られた輪飾りやちょうちん、やっこさんなどが飾られていたこと。
- ④ 郷土資料館で使用されている笹竹の種類は、館長さんのお話によると「孟宗竹(もうそうちく)」という種類であるということ。郷土資料館の敷地内の竹林の竹を毎年、職員の方々と伐採し、七夕の行事用の笹竹として活用されていること。

私は、笹竹に利用するものが竹か笹かどちらなのか気になっていました。赤塚郷土資料館の笹竹は、「孟宗竹(もうそうちく)」という竹の仲間を使用していることが分かり、すっきりしました。植物図鑑をもう一度、開き、「孟宗竹(も



うそうちく)」のところを読みました。

孟宗竹で分かったことは、幹は太く直径8～20センチメートルになり、節の間は短く、葉は小さい竹ということです。孟宗竹のたけのこは、食用になるそうです。孟宗竹のイラストや写真は、※7の78ページを複写したものです。



赤塚郷土資料館に飾られていた笹竹を見て、私は最初、驚きました。なぜなら、私が知っている現在の七夕飾りとは様子が違ったからです。少し前の時代の七夕飾りには、お供えものがあったり、馬がつるされてあったりと、今ではあまり見ない光景です。お供え物は、「たなはたつめ」の先祖を迎える風習からなのではないでしょうか。では、七夕馬をつるす理由はどんなことが考えられるのでしょうか。私は、もう一度、本を読み直すことが大切だと思いました。

## ○郷土に伝わる七夕

七夕馬を飾る理由として、※12の中に、「関東地方の農家では8月7日が近づくと、マコモでつくった七夕馬の雄と雌を飾り、農作物のみのることを願う。」とありました。少し前までは、関東地方でも農家を営むところがあり、人々の生活の中で農業は身近なものだったことが分かります。機械が発達する前は、田畑を耕すことに馬が必要とされていて、農家では、馬は身近な生き物でした。だからこそ、身近な馬を藁やマコモで七夕馬として作り、その七夕馬に豊作を願っていたのではないかと私は考えました。農業を営む家が少なくなるということは、七夕馬もだんだん見られなくなってきてしまうのではないかと私は心配になりました。この本からは、七夕馬を飾る理由は、農作物の豊作を祈るためということが分かりました。次の写真は、※12の4ページの写真を複写したものです。埼玉県上尾市で撮影されたものだそうです。



私が読んだもう一冊の本※16には、「七夕馬」という言葉ではなく、「カツモウマ」という呼び方でのっていました。そして、そのカツモウマについて「七夕の7月7日を盆入りの日として、墓そうじをするところがあります。また七夕飾りの両側に『カツモウマ』とよぶ作り物の馬をそえるところもあります。お盆を前に、迎えてくれる家の近くまできているホトケサマ(祖先)が、この馬にのって帰り、家にはいるのだそうです。」と書かれていました。

七夕馬は、地域によっては、カツモウマと呼ばれることが分かります。そして、七夕馬は、祖先がのってかえってくるための馬として飾られることも分かりました。私は、このことから、祖先がのって帰ってくるということは、日本に本来あったとされる「たなはたつめ」の風習と似ている、似ているというよりもその風習を忘れずにつないでいると考えました。平安時代、中国の文化の乞巧奠と日本の「たなはたつめ」の風習が合わさったことで、もともとあった「たなはたつめ」の風習が時代を経て、すこしずつ薄れてきてしまっていると感じましたが、その心、その風習はきちんと残っているのだなと思いました。「カツモウマ」を飾ることは、日本のもともとの「たなはたつめ」の風習、日本人が大切にしてきた心を受け継いでいく形の1つなのではないかと私は考えます。そして、このカツモウマは、七夕が終わると、沼に浮かべたり、川に流したりするそうです。

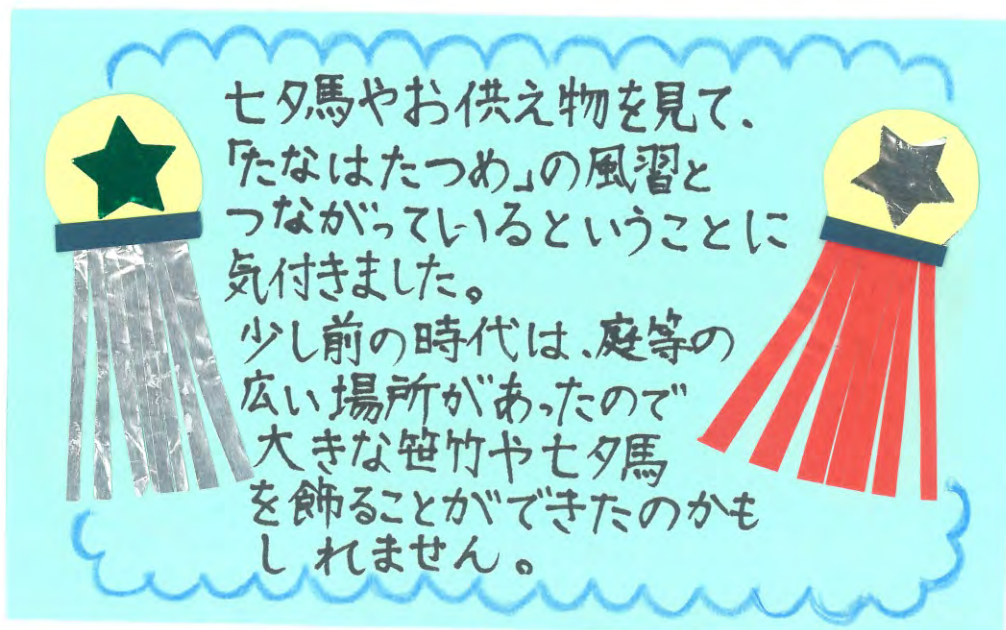
私は、各地に伝わる七夕行事には、カツモウマのように、「たなはたつめ」の



風習を残すものもあるのか気になり最後に調べてみようと思いました。

○赤塚郷土資料館の七夕のまとめ

赤塚郷土資料館の七夕飾りは、笹竹の間に「七夕馬」があり、その笹竹の前には、お供え物がある。「七夕馬」にのって、祖先が家に戻ってくる。祖先のためにお供え物もする。このような七夕の飾りは、祖先の帰りを水辺の小屋で機を織って迎える「たなはたつめ」の風習を受け継ぐ、目に見える形である。



## 7. 日本各地の七夕行事

郷土資料館の七夕飾りは、私が知っている七夕の飾りとは様子が違いました。本を読み直すと、七夕とお盆の行事には関わりがあり、郷土資料館の七夕飾りは、お盆の要素を含んだ飾りだということが分かりました。日本にもともと存在していた「たなはたつめ」の風習は、祖先を迎えるためのもの、つまり今のお盆のような風習です。この「たなはたつめ」の風習の名残を感じられる七夕の行事が郷土資料館だけではなく、日本の各地に現在もあるのでしょうか。日本各地に伝わる七夕の行事に目を向けたいと思います。地方によっては、「七夕祭り」として楽しまれている七夕の行事もあります。※3、※8、※12、※17の4冊の本を中心に日本各地に伝わる七夕行事をまとめます。

### ① 北海道

北海道の函館市や本別町など一部の地域に「ろうそくもらい」という行事があるそうです。七夕になると、浴衣を着た子どもたちが提灯を持って、提灯に火をもらうため、近所の家をまわりながらお菓子ももらうそうです。

※17に、子どもたちが口ずさむ歌が記されていました。

「タケに短冊七夕まつり大いにいわおう、ろうそく1本ちょうだいな」「ろうそく出せ出せよ、出さないとかっちゃんぞ」

「かっちゃく」というのは、方言で、「ひっかく」という意味だそうです。

この行事を知り、私は、ハロウィンみたいだなと思いました。(写真は、※17の45ページを複写しました)

## ② 秋田県能代市

「能代役七夕(のしろやくたなばた)」は、8月6日～7日に行われる城郭といったお城の形の灯ろうが市内を練り歩くお祭りだそうです。7日の夜には、灯ろうから取り外されたしゃち飾りを米代川に浮かべて、火をつけて送り流す「しゃち流し」をするそうです。「カツモウマ」も川に流していたので、私は、流すというところに、お盆をイメージしました。「たなはたつめ」の風習も祖先を迎える行事だったので、そこにつながるものだと思います。(写真は、※3を複写しました)

## ③ 秋田県湯沢市

「七夕絵どうろうまつり」は、中に火を灯して明かりをてらすどうろうに、絵を描いた絵どうろうというものがならぶお祭りだそうです。300年以上も歴史のあるお祭りです。秋田藩佐竹南家に京都からお嫁にきたお姫様が京都への思いを五色の短冊に書いて、青竹に飾り付けたのが始まりと言われています。浮世



絵美人が描かれた「絵どうろう」に夜になると明かりが灯されて美しいお祭りだそうです。(写真は、※3を複写しました)

#### ④ 宮城県仙台市

「仙台七夕まつり」は、江戸時代の初めのころに伊達政宗がすすめたとされるお祭りで、300年も受け継がれている行事です。町中が色鮮やかな七夕飾りでうめつくされて、毎年、大勢の観光客が訪れるそうです。祖父や母は、この仙台七夕飾りを実際に見たことがあると話していました。母に聞いたところ、「仙台駅にもたくさんの七夕飾りがあって、駅を利用する人を楽しませていたよ。」と言っていました。祖父は、「商店街はもっとにぎやかで見事な七夕飾りだったよ。」と教えてくれました。仙台の七夕飾りは、和紙で作るそうです。大勢の観光客が和紙の触れ合う音を聞きながら、くす玉の下をくぐっていくそうです。

私は、「仙台七夕まつり」のことは、本を読んで知っていました。東北三大祭り(青森のねぶた祭、秋田の竿灯祭り)の1つです。機会があれば本ではなく、実際に足を運んで七夕飾りを見てみたいです。(写真は※12を複写しました)

#### ⑤ 東京都台東区

「下町七夕祭り」は、東京都台東区の下町にある商店街で開かれる七夕祭りだ

そうです。「かっぱ橋本通り」という通りに七夕飾りが飾られて、通りの先に見える「スカイツリー」の姿も楽しめるお祭りのようです。七夕飾りとスカイツリーを同時に楽しめるので、想像するだけできれいな光景が浮かんできました。

(写真は、※3の97ページを複写しました)

#### ⑥ 神奈川県平塚市

「湘南ひらつか七夕祭り」は、神奈川県平塚市で行われる七夕祭りです。2キロも続く賑やかな七夕祭りだそうで、郷土芸能の「木やり節」や七夕太鼓で活気あふれた七夕祭りのようです。七夕飾りに加えて、太鼓の演奏があり日本の夏の風景を感じられそうです。(写真は、※12を複写しました)

#### ⑦ 富山県黒部市

「尾山の七夕流し」は、富山県の黒部市で行われる100年以上も前から伝わる行事だそうです。子どもたちがそれぞれの家で作った人形や船を持ち寄って、まず近所を練り歩き、その後、川の上流へ行って、台の上に乗せた姉様人形(あねさまにんぎょう)を川に流す行事だそうです。心や体のけがれやわざわいを川に流すことできれいにする意味があるようです。※17の本には、「かざりを川や海に流し、悪い空気を神様に持ち帰ってもらうというぎ式を行う地域もあり

ます」とありました。私は、「流す」や「水に関わる」といった点に、「たなはたつめ」の風習を感じました。(写真は※17の45ページを複写しました)

#### ⑧ 富山県高岡市

「戸出(といで)七夕まつり」は、富山県高岡市の戸出地区で開かれる七夕祭りで、「日本一美しい七夕祭り」「日本海随一の七夕祭り」と言われているようです。飾りの出来栄を競う「七夕コンテスト」が開かれることが分かりました。(写真は、※3の97ページを複写しました)

#### ⑨ 京都府京都市

「白峯神宮(しらみねじんぐう)七夕祭り」は、京都府京都市の白峯神宮で行われる七夕祭りで、少女たちが七夕小町の踊りをするそうです。白峯神宮は、織物の町の西陣に近い場所なので、織姫星に親しみをもっている人が多いようです。たなはたつめは、機を織ることをしていましたが、この七夕祭りでは、少女たちが踊りを踊るので、たなはたつめの名残を感じました。(写真は、※12を複写しました)



## ⑩ 島根県

島根県の雲南市(うんなんし)の「大東七夕祭り」は、440年以上も歴史があるそうです。浴衣やはっぴを着た子どもたちは、飾りつけをした笹竹を手に持って、町内を練り歩くそうです。※12の本の中に、子どもたちの掛け声について書かれていました。「てーん、てーん、てんてん、てんつくてんの七夕さん、送るわ、送るわ、七夕さん送るわ」※12より

このように口々に唱えて、夕暮れの道を川岸までいくそうです。「昔は七夕飾りを川に流して送ったが、今は、夜空に輝く彦星と織姫に幸福を願って、花火を打ち上げる」(※12)とありました。わたしは、花火の打ち上げも素敵だとは思いますが、川に流すという風習も忘れずに受け継いでほしいと思いました。「七夕さん送るわ」という掛け声のように、川に流すことで送り届けてほしいと思うからです。(写真は、※17の45ページを複写しました)

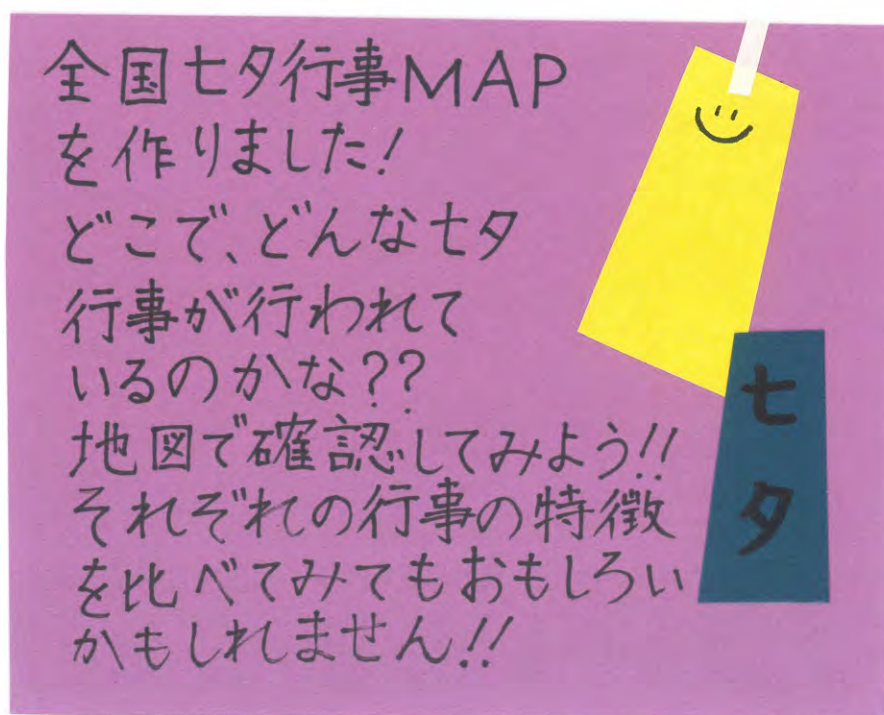
## ⑪ 山口県防府市

「防府天満宮七夕まつり」は、日本三大天神の一つである山口県防府市の防府天満宮で行われる七夕祭りです。傘玉アートといった傘で作った玉が見どころのお祭りだそうです。(写真は、※3の97ページを複写しました)

○各地の七夕行事を振り返って

秋田県能代市の「能代役七夕」や富山県黒部市の「尾山の七夕流し」そして島根県雲南市の「大東七夕祭り」は、「水に流す」ということを行っています。「カツモウマ」も祖先を迎え終わったら川に流していました。これらの七夕行事は、水辺で祖先を迎える「たなはたつめ」の風習を受け継ぐ形、名残があるものと考えられます。

七夕行事は、その土地や地域によって、いろいろな形があることが分かりました。古くからある地域に伝わる七夕の行事をできる限りそのままの形で未来へつなげて行ってほしいとも思いました。「たなはたつめ」の風習は、祖先を大切に思う日本人の心が形になったものです。祖先を大事に迎えていた日本人の心を私は、未来に伝えていきたいです。





# 全国七夕行事MAP

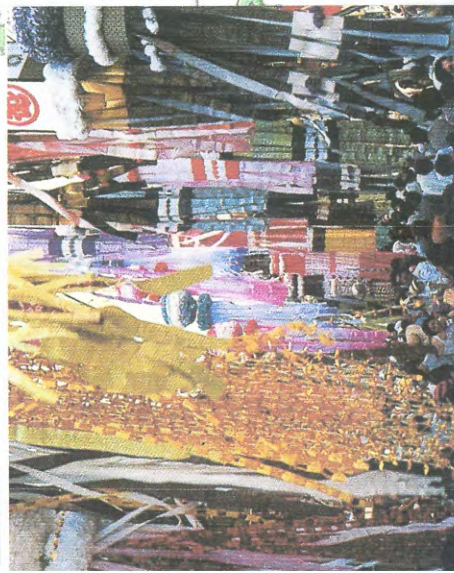
①ろうそくもらい



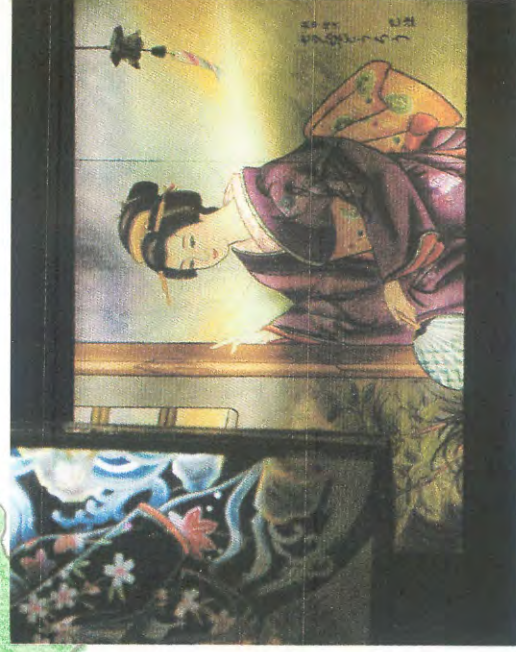
⑤下町七夕祭り



④仙台七夕まつり



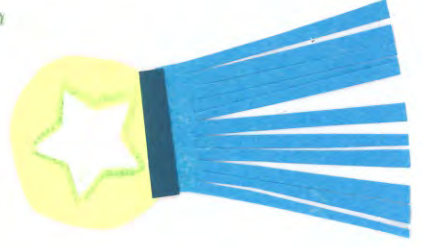
③七夕絵とろうまつり



②能代役七夕



全国各地で  
さまざまな七夕行事  
が行われています  
がね!!

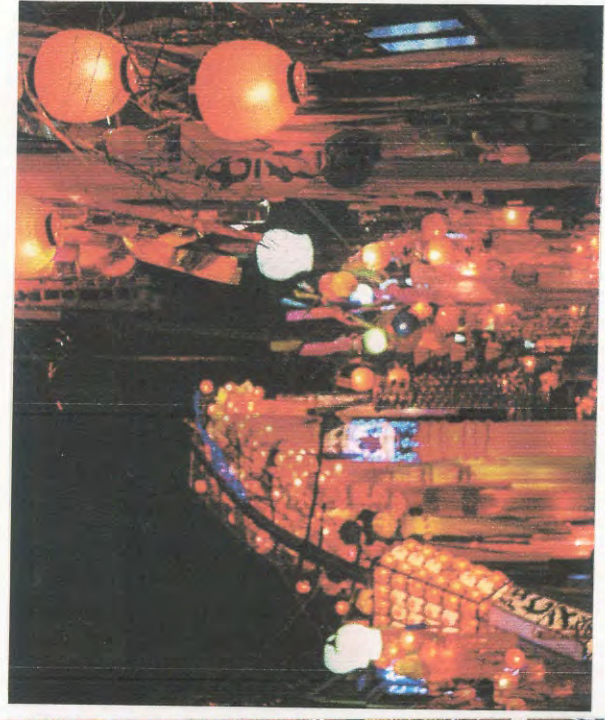




⑥ 湘南ひらつか七夕祭り



⑧ 戸出七夕祭り



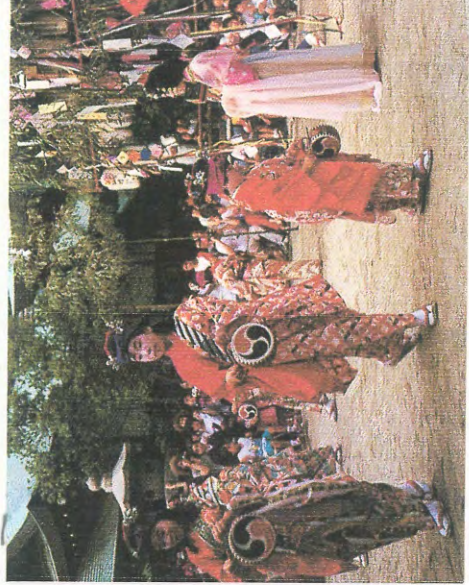
⑩ 大東七夕まつり



⑦ 尾山の七夕流し



⑨ 白峯神社七夕祭り



⑪ 防府天満宮七夕まつり





## 8. 東京タワーの 天の川イルミネーション



夏休みの終わりに東京タワーのメインデッキで行われている「天の川イルミネーション」を見に行きました。人工的に作り上げる天の川というのはどんなものなのか気になったので、見学することにしました。

フロアの一部にLED電球で天の川が表現されており、思わず「きれい」とつぶやいていました。そのLED電球の天の川が窓ガラスに反射して、窓から見える夜景と重なって、まるで本物の天の川が東京の上空に流れているようでした。毎年、7月7日の七夕に、夜空を見上げますが、天の川どころか星を見ることにも苦労して、天の川は結局見ることはできません。だから本物の天の川でなくとも普段、星を見るのが難しい環境にいる人にとっては、感動的だと思います。このような形で天の川を眺めるのも1つの楽しみなのかなと思いました。ただ、イルミネーションを見ることだけに満足せず、夜空を流れる本物の天の川を眺めることや五節供である七夕の行事そのものにも目をむけることも大切なのではないかと思いました。(写真は、令和5年8月28日、自分で撮影。)



# 終わりに



5年生の学芸会で「銀河鉄道の夜」という劇をしたことが七夕について調べようと思ったきっかけでした。なぜ笹竹に願い事を書いた短冊を飾るのだろう、七夕の行事食はどんなものなのか、七夕の行事の始まりはいつなのか、とたくさんの疑問がわいてきました。まず、今まで自分はどのように「七夕」を過ごしてきたのか振り返りました。次に、七夕行事の成り立ちについて調べました。七夕行事は平安時代に伝わった中国の乞巧奠と日本の「たなはたつめ」の習わしが合わさってできたこと。中国の乞巧奠は書道や裁縫、音楽などの上達を願っていたこと。そして、「たなはたつめ」は今でいうお盆の行事に似ていたことがわかりました。私は「たなはたつめ」の風習を知って織姫の仕事と似ているなど感じました。日本にもとからあった風習と、中国から伝わってきた風習が似ていたからこそ中国の文化を受け入れ、「七夕」という行事を生み出すことができたのではないかとまとめました。それから、七夕の行事食や飾りの意味について調べました。七夕の行事食はそうめん、中国のお菓子、「索餅」がもととなっていて2つとも織姫の糸をイメージした食べ物であることや、ある地域ではすいかをお供えしたり、あんこを絡めたほうとうを食べたりすることを学びました。七夕飾りの意味については、健康、豊作、金運、こどもの成長などを祈願したものがありました。食べ物や飾り一つ一つに願いが込められていて、その思いを受け継いでい



くことが大切なことだと感じました。さらに、周りの人に協力していただいて七夕の短冊に書いた願い事についてアンケートを取りました。そこでは、年齢を重ねるにつれ、自分自身に関わる願い事というより、家族や世界のことに目を向けて願っていることも知りました。最後に日本各地に伝わる七夕行事について調べました。調べた行事のうち「たなはたつめ」の風習や「カツモウマ」の風習と結びついているものもあると気づき、日本各地で昔の人が大切にしてきた心を受け継いでいると学びました。

1年を通じて日本にはたくさんの行事があります。季節と結びついた行事、人生の節目の行事。行事はその土地に伝わる文化、歴史を伝えていく役割があったり、地域の大事な習わしや自然を伝えたり、昔と今の人を結ぶきずなだと思います。だからこそ日本に伝わる行事のことを知り、1つ1つの行事に親しみ、その行事に込められている意味や思いを伝えていき、日本人が大切にしてきた心を未来につなげていきたいとこの調べる学習を通じて、考えることができました。

小学校1年生の調べる学習では、重陽の節供(菊の節供)について調べました。今年が小学校生活最後の調べ学習となりました。行事から始まった調べ学習でしたが、今年選んだテーマが七夕で、たまたま行事でゴールすることになりました。行事に詳しくなれたと思う自分がいて少しは成長したかなと思います。

七夕に何を願う？私の答えは、七夕の行事が未来まで続きますように、です。

# 参考にした本



- ※1 「歌はともだち」 2018年3月26日 教芸音楽研究グループ  
株式会社教育芸術社
- ※2 「新レインボー小学国語辞典」 2015年12月22日 土屋徹  
株式会社学研プラス
- ※3 「由来からわかる日本と世界の行事図鑑」 2020年12月10日  
山田慎也 株式会社スタジオタッククリエイティブ
- ※4 「行事の名前のひみつ」 2004年3月31日 国松俊英  
株式会社岩崎書店
- ※5 「えほん百科ぎょうじのゆらい」 2002年10月20日 野間佐和子  
株式会社講談社
- ※6 「ちびまる子ちゃんの春夏秋冬教室」 2010年3月31日 関根健一  
株式会社集英社
- ※7 「小学館の図鑑●NEO 植物」 山川史郎 株式会社小学館
- ※8 「はじめて知るみんなの行事とくらし」 2008年12月22日  
藤原郁久 株式会社学習研究社
- ※9 「しばわんこの和の行事えほん」 平成26年12月17日  
川浦良枝 株式会社白泉社

※10「知ろう！遊ぼう！すてきな日本の伝統 3巻 行事、しきたり、芸のう」

2015年10月 升川和雄 株式会社教育画劇

※11「かこさとし こどもの行事 しぜんと生活 7月のまき」

2012年6月9日 かこさとし 株式会社小峰書店

※12「学習に役立つわたしたちの年中行事」

2006年4月25日 芳賀日出男 株式会社クレオ

※13「しばわんこの和のこころ」平成16年4月15日

川浦良枝 株式会社白泉社

※14「家族で楽しむ日本の行事としきたり」 2006年2月

石田繁美 株式会社ポプラ社

※15「日本の伝統文化 和食 ④楽しもう！和食と伝統行事」

2020年8月3日 江原絢子 株式会社学研プラス

※16「道具からみる昔の暮らしと子どもたち④」 2017年2月15日

須藤功 一般社団法人 農村漁村文化協会

※17「へえ！もっと知りたくなる日本の四季と行事 春・夏」

2019年12月25日 小池淳一 WAVE 出版

※18 豊島区立池袋第一小学校ホームページ URL

<https://toshima.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1310123>



# 訪れた施設



☆1 板橋区熊野神社 東京都板橋区熊野町1-1-2

☆2 深川江戸資料館 東京都江東区白河1-3-28

☆3 東板橋公園 東京都板橋区板橋3-50-1

☆4 板橋区郷土資料館 板橋区赤塚5丁目35-25

☆5 東京タワー 東京都港区芝公園4-2-8

# 利用した図書館



豊島区立池袋図書館 豊島区池袋3-29-10

北区立中央図書館 北区十条台1-2-5

板橋区立東板橋図書館 板橋区加賀1-10-15

